

# 人との出会いが私の財産

伊達市長（北海道） 菊谷秀吉

私は財政再建を最大の公約に掲げ、平成十一年四月に行われた統一地方選挙で伊達市長選挙に立候補、初当選し市長に就任しました。その当時からさかのぼること四年前、現職の市議会議長だった私は、このままではいずれ市の財政は行き詰まるとの思いから、一念発起し市長選挙に初挑戦しました。結果は、残念ながら当時の現職市長に僅差で敗退しました。それから四年後の再挑戦で初当選を果たし、自宅に駆け付けてくれた多くの支援者に見送られ、意気揚々と迎えの公用車に乗り初登庁しました。

職員へ就任のあいさつを済まし、市長室に戻って間もなく、財政課長が部屋に入ってきました。「市長、申し訳ありません。基金がほとんどあり

ません」と開口一番、私は財政の現状を聞かされました。その課長は私と同じ町内に住んでおり、最初の市長選挙挑戦の後、二カ月ほどした町内のお葬式で一緒になった時に、「菊谷さん、市の財政は健全ですよ」と言われたことがありました。そのことを覚えていたから、市長室まで謝りにきたのだと思います。私の想像をはるかに超えた財政の悪化に「ぐげんとしました」。

それから私は、市内のあらゆる会合で市の財政状況を分かりやすく説明し、理解を求めました。当時は東京都の財政悪化が連日にわたって報道され、市民は「伊達市もそうなのか」と感覚的には理解しており、暗黙の協力が得られそうな雰囲気でした。

しかし、秋口ごろから市民や議会から「財政の現状は分かったが、財政が厳しいと言うだけでは、あなたが市長になった意味がないのではないか。あなたは市長なのだから、市民に未来への夢や希望を与えなければならぬ」と言われることが多くなりました。当時、私は職員や議会、市民に「お金が無ければ、知恵と汗を出そう」と呼び掛けましたが、最後は必ず「市長、どうするの」が決まり文句でした。夢や希望を簡単に持つことができれば苦労などないのにも思ったものです。



本年3月の「地域づくり総務大臣表彰式」でダイヤル・サービス(株)今野由梨社長から祝福を受ける筆者

そのような時、ふと脳裏に思い浮かんだのが、「人の誘致」という言葉でした。本市は、移住がこれほど話題となる以前から、北海道内では気が比較的温

暖で冬期間の降雪量が少ないことから、最後の住まいとして隠れた人気がありました。私はまちを二分した二度の市長選挙を通して、道内はもとより本州からも実に多くの人が移り住んでいることを知りました。中でも印象的だったのは、浜松市から移住して来た人の家に飛び込みで訪問した時、そのお宅の奥さまが「海が見える所に家を建てたくて日本中を旅しました。その中で、この場所から臨む海の景色がとても気に入って決めました」と言われたことです。

当時、「二〇〇七年問題」という言葉をあまり耳にすることはありませんでしたが、私自身が広義の団塊世代でもあり、アイデアとしてはいいけるのではないかと思いました。しかし、口に出したものの具体的な政策として練り上げるには、イメージは浮かぶものの政策を立案した経験がありませんでしたので、各論に進めずどこかしさを感じていました。

そのような時にある人と出会い、思わぬ展開になりました。その人は、兄の知人で今野由梨さんという東京で会社を経営する女性社長です。二十年ほど前より、兄からいつも名前を聞かされてい

ました。今野さんは政府税制調査会委員、北海道開発審議会委員など数々の公職に就き、起業家としてもとても有名な方でした。平成十一年秋に何かアドバイスをいただこうと、田舎者にとっては「敷居が高いな」と感じつつ、会社を訪問させていただきました。そして、翌十二年の夏ごろ、「勉強会があるので参加してみませんか」と声を掛けていただきました。

それが契機となり、「人の誘致」のアイデアが本市におけるまちづくりの大きな柱の一つである「伊達ウエルシールド構想」へと発展していきました。この構想は、定年退職を迎えたシニア世代の移住やロングステイを促進し、消費の拡大と新しいビジネスチャンスの創出を目指すものです。

また、「生活産業情報懇談会」という勉強会に参加する機会を得ました。この会はNTTデータ経営研究所が主催し、大企業や大学教授などの有識者が集まり、厳しい雇用状況を改善すべく生活産業を創造しようというものでした。現千葉商科大学の学長で、当時は慶應義塾大学教授であった島田晴雄先生が座長、また、当時、立教大学教授であった斎藤精一郎先生がNTTデータ経営研究

り、有名無名を問わずさまざまな分野の方々と出会ってきました。その多くは市長にならなければ話すことはもちろんのこと、出会うこともなかったであろうという方々です。画家、音楽家、小説家などの著名な芸術家をはじめ、大学教授、新聞・テレビなどの在京のマスコミ人、最近では有名な企業経営者に出会うことも多くなってきました。一流の方は厳しい目を持っているという私の潜在意識は、その際、自分自身が面接を受けているような気持ちにさせました。市長就任当初は、なおのことでした。しかし、慣れとは恐ろしいもので、いつの間にかそのような気後れもなくなってきました。

最近はまだづくりの成功事例として、総理官邸で発表の機会を得たり、講演の依頼などが増えてきたりしていますが、まだとても成功したとは思っておらず、これからが本番と考えています。今野さんとの出会いが大きな一歩となりましたが、今、地方は言葉では表現できないほど難しい局面を迎えています。まちづくりは“人”で決まります。人との出会いを大切にしながら、いいまちを創ろうと決意を新たにしています。



総理官邸で開かれた「地域のお宝発掘自慢大会」でまちづくりを説明

所所長で、かつ、副座長でした。お二方ともテレビで拝見する方なので、とても緊張しながら参加したことを覚えています。  
今野さんとの出会いから人の付き合いが広が